

1264年の国王軍

朝 治 啓 三

Summary

Knights Summoned to the Battlefield of Lewes

Keizo Asaji

In the battle of Lewes, May 14, 1264, cavalries under the command of Prince Edward drove the foot soldiers, the Londoners, easily from the field. This temporary distraction of Edward's division pursuing the Londoners seems to have been the main cause of the defeat of King Henry III's army. Besides the mistake in the strategy, is there any other cause of military failure of the king's army? The composition of the army needs to be examined.

According to *Close Rolls* the king summoned the feudal host twice in march 1264: 123 men mainly of barons on March 6, and 106 men, mainly of knights, on March 18, were summoned. Besides the feudal host, he also ordered the sheriff of each county to summon all the men who owed service to the king on March 6. Of all the tenants-in-chief who were summoned then, 58 of the barons and 20 of the knights were recorded as having owed military service to the king in the *Inquisitions Post Mortem*. Investigation of *IPM* gives us information about these 78 men and the amount of knight service which each landholder owed to the king. We can obtain the following points from the investigation.

Firstly, tenants-in-chief did not always owe knight service (about 50 per cent of barons and 20 per cent of knights). Secondly, most of the barons owed rather small amount of services for their tenure of land. Thirdly, the lesser tenants-in-chief owed such a little service (such as one-twentieth of one knight's service) that they actually don't seem to have performed the military duty.

Judging from these results of the investigation, it seems that the king found it difficult to array the lesser tenants-in-chief by his own order alone. The knights tended to owe military service more to the magnates than to the king. Certain magnates (e. g. earl of Gloucester) could retain the right to receive a large amount of military service from their tenants as well as the lesser tenants-in-chief.

So we can conclude that the king needed to depend upon the magnates for the array of feudal knights. The Cavalry of king's army consisted not only of the feudal host but also of mercenaries and household knights. Although we cannot know much about mercenaries because of the shortage of evidence, those who could retain a certain number of household knights were apparently the king and the magnates. So a few magnates tended to be a great military power on whom the king had to depend in battlefields. Some magnates were discontented with the king's policy of patronage and turned hostile to the king in the battle of Lewes.

イングランド議会史上はじめて都市代表が参加したことで知られる、1265年1月のいわゆるシモン・ド・モンフォールの議会は、その名の通り前年1264年5月14日、リュイス Lewes の戦いで国王軍に完勝した、レスター伯シモン・ド・モンフォールの主導のもとに、国王ヘンリ三世の名で召集されたものである。もしこの戦いでレスター伯の軍が敗れていれば、1258年以来続いていたバロンの改革運動は1264年5月に終息し、有名な議会の開催も実現しなかったかもしれない。従ってイングランド議会史上におけるリュイスの戦いの意義は、決して小さいものとは言えない¹⁾。

筆者はこれまでにリュイスの戦いの前後における国制史上の諸変化に関して若干の考察を行なった²⁾。本稿ではリュイスの戦いを軍事史的側面から考察する。もとより入手し得る資料は限られているので、取り敢えず1264年当時の封建騎士軍の状況を探ることに焦点を絞りたいと思う。

順序として、まずリュイスの戦いの経過を概観し、次いで学説史を辿りつつ軍事史上の論点とされてきた諸点を検討する。更にこれらの諸点のうち、国王軍の構成如何についてより立ち入った考察を行なう。結果として当時の封建騎士軍 feudal host の状況について新しい知見が得られることを期したい。

1 リュイスの戦い

戦闘の具体的な経過は公文書には現われないので、各種の年代記の記述に頼るほかはない。これらの年代記を要領よく利用して戦闘の様相を再構成したのが Ramsay, J. H. の *The Dawn of The Constitution* である³⁾。本節では主として Ramsay の記述を主に利用して、戦闘を概観する⁴⁾。

(1) 交渉

1264年1月23日アミアンの地でフランス国王によって、イングランド国王ヘンリ三世とレスター伯シモン・ド・モンフォールとの紛争に裁定が下された。いわゆるアミアン裁定である。内容の要点は、レスター伯等が国政改革運動の指針としてきたオクスフォード条項は王権を制限するものとして否定されること、王城は国王に返還されること、イングランドの公職の任免権は国王にのみ属すものであること等である。シモンへの配慮としては僅かに、改革運動中の行動に対する恩赦を王に求めたことだけであった⁵⁾。ヘンリ三世に一方的に有利なこの裁定は、公表直後からイングランドの改革派聖職者、ロンドン市民、五港都市民等の間に不満を呼び起こし、それまでシモンに批判的であった大貴族グロスター伯ギルバートさえも、シモンに同情したと言われている⁶⁾。改革派にとって最大の不満点は、国王のフランス人の親戚をイングランドの公職に就ける権利を排他的に王に与えてしまったことである⁷⁾。ともかくヘンリ三世はこの裁定に勇気付けられて、2月15日にドーバーへ上陸すると⁸⁾、自らの権威回復に取りかかっ

た。

この頃ウェールズ辺境地方では、この地方にあったシモンの領地が国王によって Roger Mortimer という辺境領主に与えられた事件を契機に、国王支持派と反国王派との間に紛争が生じていた⁹⁾。シモンはウェールズ王ルウェリン Llewelyn と協力して勢力回復を図ったが、その事が逆に、ウェールズ嫌いの辺境領主たちの反撥を買い、この地方でのシモンの立場は良くならなかった。その後、皇太子エドワード（のちのエドワード一世）も帰国して、辺境地方の拠点都市グロスターに乗り込んだため、シモン支持派との間に小ぜりあいが続いた。

3月7日までウィンザーにいた国王は、レディングを経て8日にはオクスフォードに到着した。不満を持つ改革派バロンたちとの話し合い解決を企てた王は、リッチフィールド Lichfield 司教 Roger Longsword を代理人に任命し、3月13日 Brackley での会談を申し出た¹⁰⁾。バロンたちはロンドン司教、ウィンチェスター司教、チチェスター司教を代表に選び、交渉にあたらせることにした¹¹⁾。王は会談出席者に safe conduct を与える一方で、3月6日以来数度にわたってオクスフォードへの軍隊召集を発令するなど高圧的な態度に出た。会談そのものの内容は不明であるが、バロン側代表が公職への外人任用条項を外すならアミアン裁定を受け容れてよいと言ったのに対し、王は上述の行動から判断して、バロンの要求を一蹴したものとみられている。会談の最中3月23日から29日にかけてロンドン市民が暴動を起こし、王弟リチャード（コーンウォール伯）や王の義弟 William de Valence たちの領土を襲った¹²⁾為か、結局交渉は3月31日に物別れとなった。その後、王は Warenne (Surrey) 伯や Rager Leyburne 等をケント地方へ派遣し、一方シモンはロンドンに入った。（地図1参照）

(2) ノーサンプトンの戦い

交渉決裂の後、王は武力による事態の打開を図ろうとする。4月3日オクスフォードを出発し、4日にはノーサンプトン市を包囲する。ノーサンプトンは中英の拠点となる都市で、シモンはここに兵を集めていた¹³⁾。5日にはノーサンプトンの町は難なく占領され、翌日には城も落ちた。この戦いでシモン側の多くの有力者が国王軍の捕虜となった。年代記によれば旗持騎士 banneret と騎士 knight 15人、その他の武装者 men-at-arms 60人といわれる。そのうち主だった人々は Simon de Montfort junior, Peter de Montfort, Adam de Newmarket, William Marshal, Balwin Wake, William Furnival, Ralph Basset of Drayton, Ingram Balliol, John le Despenser である¹⁴⁾。シモンは王軍がノーサンプトンに包囲した報を聞き、軍を率いてロンドンを出発したが、セント・オールバンズ St. Albans まで来たところでノーサンプトン城陥落を知り、ロンドンに引き返した。ロンドン市内では王に対する不満はいよいよたかまり、市民たちは王に通報するかもしれないと疑われていたユダヤ人たちを殺した。

シモンは東南英における王の拠点の一つであったロチェスター城を占拠しようとして、4月16日ロンドンを出発した。17日にはグロスター伯も Tonbridge から出て、この攻撃に加わった。19日城の外壁は落ちたが、Warenne 伯や Leyburne の立て籠もる天守 Keep は落ちなかった。王は4月10日にノーサンプトンを出てから中英各地を、またエドワードは西英を攻め、

地図 1



Barrow, G. W. S., *Feudal Britain*, London, 1956, p.365 より。

ほとんどの都市を無抵抗で開城させていたが、シモンによるロチェスター攻撃を聞き、4月24日から28日の5日間で156マイルを走破してロチェスターに到着した。シモンは王接近の報を聞き26日にはロンドンに戻った。一方国王はロチェスター救援には成功したものの、ケントやサセックス地方では住民の支持を得られず、小ぜりあいを繰り返しつつ、Tonbridge, Robertsbridge, Battle, Winchelsea といった拠点都市を渡り歩くことを余儀なくされた。

5月6日王は兵をリュイスに集めるべく、各種の召集状を発行する¹⁵⁾。5月11日に王はリュイスの St. Pancras 修道院に入り、エドワードはリュイス城に宿舎をとった。ここでも幾人か

地元のバロンたちに召集状を出している¹⁶⁾。

一方、シモンの率いるバロンたちの軍は、5月6日にロンドンを発ち王の動きを見ながら南下したが、王がリュイスに入ったとの情報に基づき、5月11日にはリュイスの北約9マイルのFletchingに入った。ここから翌12日、シモンとギルバートとは国王に宛て「悪しき助言者の追放」を求める最後の和解提案の手紙を、チチェスター司教に託した。王は即日、両伯に対し「封建的君臣関係を解消する」との返事を出し、王子、王弟も激しく両伯を非難する手紙を発している¹⁷⁾。これを受け取ったシモンとギルバートとは最早話し合いの余地は無くなったと判断し、武力対決の意志を固めた¹⁸⁾。

(3) リュイスの戦い

5月13日夜は準備と祈りに充てられた。聖戦の意を込め、敵味方の識別の目的のために、シモンの軍に結集した人々は白十字のたすきをかけた。この時点での参加者数においても、身分の上下においても王軍が上まわっていた。

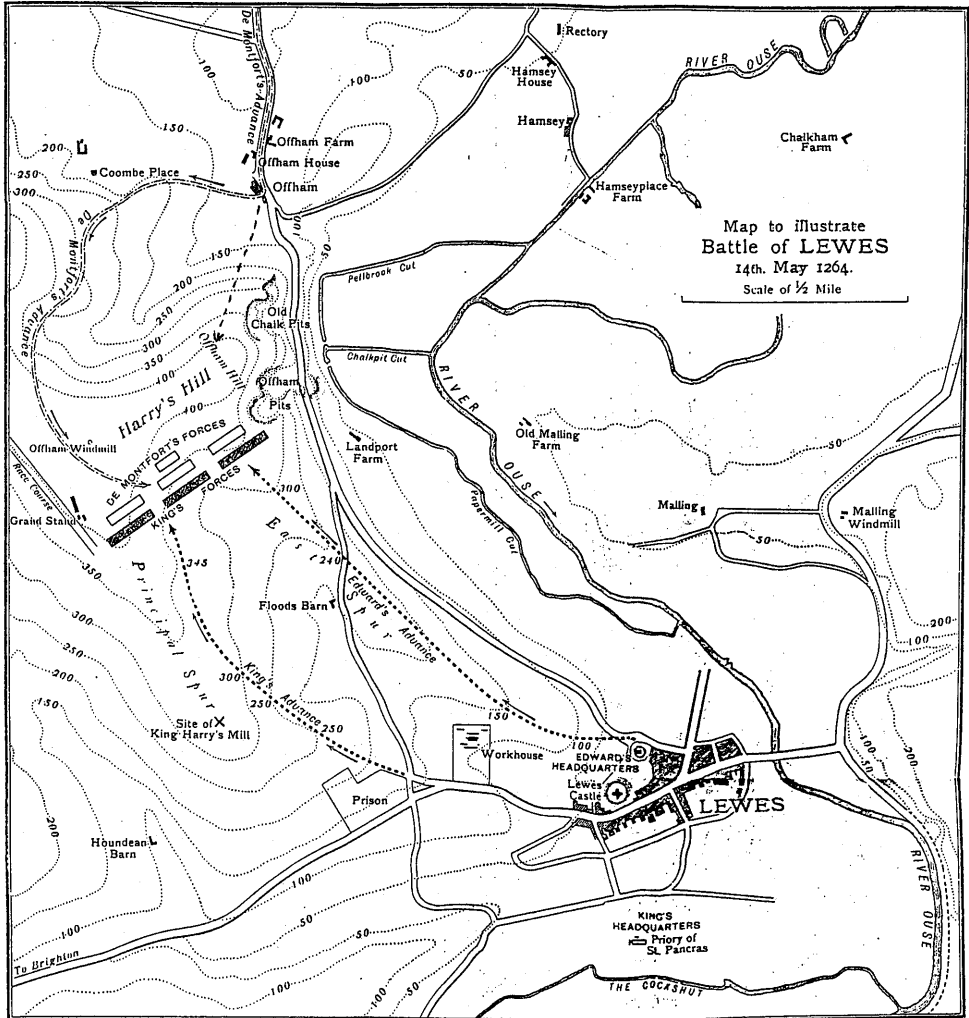
リュイスの町は South Downs と呼ばれる南英特有の丘陵地帯の南側斜面に位置し、Ouse川によってきり込まれた谷の西側のかなりの傾斜地にへばりつくようにできた町である。町を見おろす丘の頂上は海拔400フィートで東西に広がる平地となっている。そこから町の方角へ尾根の一つの支脈が、もう一つの支脈が町の西側へと下っている。ドゥームズディ・ブック作成時、登録された住民数は1484人、うち burgeses は426人であった。城は征服王とともに来た William de Warenne によって11世紀末に建築がはじまり、12世紀に天守閣 Keep もできた。St. Pancras 修道院は1077年頃建設が始まった¹⁹⁾。(地図2参照)

5月14日水曜日、日の出とともにシモンの軍隊は Fletching を出発、一路南下して Offam に至り、そこからリュイスの町へ直行するのではなく、Harry's Hill と呼ばれる丘の上へ登った。シモンは去る1月にアミアンへ出かける前に落馬して骨折していたため、この戦いの直前まで carriage に乗っていたが、それをリュイスから2マイル北の地点で乗り捨て、そばに旗印のついた荷箱を置いた。その中にはシモンを裏切ろうとしたロンドン市民4人がとじ込められていた。

国王は丘の上に歩哨を置いていたが、14日朝にはその歩哨は眠りこんでいて、シモン軍の接近には気付かなかった。丘上に勢揃いしたシモン軍は、すぐ攻撃せず小休止した²⁰⁾。シモンは軍を四隊に分けた。左翼にはロンドン市民が急遽編成した歩兵中心の軍隊、それにバロンの中から Nicholas Segrave, Geoffrey Lucy, Henry of Hastings が加わった。中堅はグロスター伯が率い、そこには Joha fitz John, William of Montchensy が加わった。右翼はシモンの息子の Henry と Guy が率い、Humphrey de Bohun Junior と John de Burgh が加わった。シモン自身は Thomas of Pelveston とともに補助隊を率いた。攻撃に移る前にシモンは若い領主たち何人かを騎士叙任した。それはグロスター伯ギルバート、その弟トマス、オクスフォード伯 Robert de Vere、それに Henry of Hastings と John de Burgh たちである。

年代記に依れば国王軍は三隊に分かれており、右翼を率いていたのは皇太子エドワードで、

地図 2



Ramsey, J.H., *The Dawn of the Constitution*, Oxford, 1908 より。

ここには Warenne 伯, William de Valence, Guy de Lusignan, Hugh Bigod が加わっていた。中堅は王自らが率い、左翼は王弟リチャードがその息子ヘンリとともに率いたとされている。両軍の人名を比較すると、概して王軍に大貴族が、シモン軍には「最近大所領を相続したばかりの若い貴族²¹⁾が多い。

リュイスに居た王軍のうち、丘上に勢揃いしたシモン軍を最初に発見したのはエドワード隊で、リュイス城の Keep の上からは丘の斜面をはっきり望むことができた。ラップがならされ、エドワード隊は斜面を一気に駆けのぼった。正面にいたロンドン市民隊はこれを見て後退したが、エドワード隊は追撃し、丘の頂上から向う側の崖へと追い落した。散り散りになって逃げる市民軍を尚も追いかけてまわし、おかげで崖下から Malling Mill までの間にひろがる沼地で、約80人が溺死した。また崖下の石切場からは無数の人骨が発見されている。その後もエドワード隊はロンドンの方向へ2乃至3マイルも追跡したと言われている。帰り道でエドワード隊は

シモンの旗印のついた carriage と荷箱を発見、中にシモンが隠れているものと誤解して、その守備隊もろとも滅ぼしてしまった。こうしてエドワードが戦場に戻ってきたときには、リュイスの町は火につつまれ、父と叔父は事実上シモン軍の捕虜になっていた。エドワード隊にいた Warenne 伯と William de Valence, Guy de Lusignan それに Hugh Bigod は活路を開いて逃亡し、Pevensey から船でフランスへ逃れた。エドワード自身はひとまず Friars Minors (フランススカン) 修道院へ避難した。

一方、戦場に残っていたシモン軍は、国王の率いる隊に対して攻撃を集中した。そのため王軍の騎兵は逃げまどい、一部は町の西の沼地にはまりこんで溺死した。一方では先陣の功を焦って突進してきた John Giffard を捕えながらも、他方では王軍左翼の総崩れのため、王はついに戦闘を放棄して St. Pancras 修道院へ避難した²²⁾。王弟は風車小屋に潜んでいたが、シモン軍に包囲されて捕えられた²³⁾。その後も町のそばまで戦闘は拡がり、このあたりでも人骨が発見されている。その戦闘のすざまじさは多くの年代記の語るところである。

この間、シモン軍の捕虜となった国王軍戦士のうち有力者には次の様な人々がいた。Roger Mortimer, John fitz Alan, William Bardulf, Henry Percy, Roger Clifford, Roger Leyburne, Philip Basset, Hamo L'Estrange, Robert Brus, John Balliol, John Cumyn of Badenoch.

別々の聖域に避難した王と皇太子とに使者を介して交渉する自由をシモンが与えたので、両者話し合いの結果、国王軍の降伏が正式に確定した。王、皇太子、王弟、その息子はいずれもシモンの手中に捕らえられることになった。シモンに有利なこの状況の下で、14日夜から15日朝にかけて、和平条件が作成された。いわゆる Mise of Lewes と言われるものだが、それ自体は現存していない。恐らく公職からの外人追放、ウェストミンスター条項の遵守、シモン等への恩赦、しかるべき合意成立のための仲裁委員会の任命、これらの条件の保障のためにエドワードと王弟の息子ヘンリーをシモンの人質とすること等が主な内容であろうと言われている²⁴⁾。こうしてリュイスの戦いはシモン軍の完勝という形で終わった。

2 研究史の整理

各種の年代記を史料とし、概ねこれらの共通する部分を用いてリュイスの戦いを描けば、叙上の Ramsay 説のようになろう。ところでそれらの年代記の叙述には少しずつ異同があり、また粗密にも差がある。同時代のものもあれば、後代のものもある。そのため戦いの過程を再構成する際にも、どの年代記にどの程度の信をおくかにより、事実認識や解釈に差が生ずることになる。それらの差のうち、いくつかを列挙すれば以下のようなになる。

- (1) 戦いの日付は5月14日であるか否か²⁵⁾。
- (2) シモン・ド・モンフォールが乗ってきた carriage は四輪車か人がかつぐ輿か²⁶⁾。
- (3) シモンが Offam から丘上へ登った経路はどこか²⁷⁾。
- (4) シモンの carriage に閉じ込められていたロンドン市民の数は何人か²⁸⁾。
- (5) その carriage が戦いの間じゅう置かれていた場所はどこか²⁹⁾。
- (6) エドワード隊がロンドン市民軍を追撃した距離は何マイルか³⁰⁾。

- (7) エドワード隊が戦闘現場を離れていたのは何時間か³¹⁾。
- (8) エドワード隊によるシモンの carriage に対する攻撃は、ロンドン市民軍への攻撃の前か後か³²⁾。
- (9) シモンの軍隊と国王の軍隊とが衝突したのは丘の上か下か³³⁾。
- (10) 王軍の三隊のうちヘンリ三世が率いたのは中堅か右翼か³⁴⁾。
- (11) シモンは王軍の寝込みを襲ったのか³⁵⁾。
- (12) 王が降伏したのは戦場でか、それとも St. Pancras 修道院においてか³⁶⁾。
- (13) この戦いの死者数はどの程度か³⁷⁾。
- (14) この戦いの全参加者数はどの程度か³⁸⁾。

以上の諸論点を次の四種に分類してみる。

- (A) いくつかの年代記をつきあわせることによりほぼ解決がつくもの。(1), (4), (8), (12)
- (B) 戦い前後の状況から判断すれば、ある程度推定可能なもの。(3), (5), (13)
- (C) 殆ど推定不可能のもの。(2), (6), (10), (14)
- (D) 事実の認識というよりも、事実の解釈に属すと思われるもの。(7), (9), (11)

(A)から順に現在まで研究状況を簡単に辿っておこう。

- (A)(1) 多数説は5月14日である³⁹⁾。(4) 多くの年代記が4人説である⁴⁰⁾。
- (8) 後をとる年代記が多い⁴¹⁾。
- (12) St. Pancras 修道院において降伏したという説が有力である。最近 D. Carpenter 博士もこの説を追認している⁴²⁾。
- (B)(3) 年代記には具体的な経路の記述は無いが、地理的に考えて Ramsay 説ではなく Burne 説の方が有力である⁴³⁾。
- (5) Blaauw は Wykes を根拠に丘の上に置かれていたとするが、Burne はこれを批判し、もしそうならエドワードがロンドン市民軍を蹴散らしている間には carriage をみつけず、後に気がつくというのは不合理であると述べている。多くの説がこれを支持している⁴⁴⁾。
- (13) Blaauw の伝える未公刊手稿本に依れば、この戦いの戦死者の屍体を片付けた St. Pancras 修道院の年代記は死者2700と述べている。この数字は中世の年代記特有の誇大化傾向に影響されているであろうが、人骨の発掘状況はこれと大差ない数字を示しているようである⁴⁵⁾。
- (C)(2) 年代記にはどちらとも書かれていないが、それでも問題になり得るのは(5)と関連するからである。もし四輪車なら400フィートの丘の上へでも運び上げることができたのではないかとの研究者の思いから出た発想であろう。
- (6) 具体的には何マイルとは出てこないが、(7)との関連で是非ははっきりさせねばならない点である。
- (10) 年代記には「第一の隊」とか「次の隊」として登場するだけなので位置まではわからない。それでも問題となるのは、王が中堅を率いないはずはないという研究者の先入観

が影響したためであろう⁴⁶⁾。

(14) 王軍6万人、シモン軍4万人といった大規模な軍勢を推定するものから、両軍あわせて数千人とみる説まで、バラつきがあって一致しない。ただ王軍の方が多いというのは一致した見方ではある。現在では両軍とも少なく見積もる傾向にある⁴⁷⁾。

(D) これら三点はいずれも判明している事実の範囲内で複数の解釈が可能なものである。と同時に、その解釈如何ではリュイスの戦いの意義の解明にも影響を与えかねない諸点である。すなわち、(7)エドワード隊の戦線離脱時間について言えば、もしこれが短ければ、その短時間の間に戦場に残っていた王軍とシモン軍との間の戦闘に決着が付いたことになり、シモン軍の圧倒的な強大さが必要条件になる。もし逆に長時間離れていたと言うのであれば、エドワードは状況判断を誤り、敵につけ入る隙を与えてしまったということになるろう。

(9)について言えば年代記には丘の上とも下とも書かれてはいない。もし丘の上で王軍とシモン軍との最初の衝突があったとするならば、シモンは先制攻撃をかけないで下から登ってくる王軍を待ちかまえていたことになり、シモン軍の急襲説は崩れる。もし逆に丘の下の方で衝突したとするなら、シモン軍左翼のロンドン市民隊も丘の下まで来ていたはずであるから、エドワード隊は城を出てすぐロンドン市民隊と衝突し丘の上まで追上げたことになる訳で、皇太子は王や王弟を見捨てて勝手な振舞をしたことになろう。

(11)について言えば、年代記の記述も現代の研究者も急襲説と反急襲説とに二分されている⁴⁸⁾。もし急襲のせいでシモン軍が勝利したのなら、それは実力による勝利とは言えず、正々堂々というシモンのイメージに傷をつけることになろう。もし王が攻撃するのを待って反撃したというのであれば、やむを得ぬ実行使ということで浄化されるであろう。Burneに依れば1500人分の人骨がまとめて埋葬されていたのが丘の下にある現在の監獄のそばであることから、戦闘は丘の下でなされた可能性が強いと解釈される。それにしてもこれは推定にとどまる⁴⁹⁾。

そこで次に(7)と(9)についてやや詳しく調べて見よう。上述したようにこれらは共にエドワードの戦いぶりと関係がある。

この日の早朝から夕方までを時間を追って再現しようとした研究例がいくつかある⁵⁰⁾。(表1参照)

表1の四人の研究者による戦闘の再現は、当日の日の出時刻の同定さえくい違いを見せている程なので、相当大まかなものと言える。四人のうちBurneとLemmonとで一致しているのはOffamからHarry's Hill頂上へのシモン軍の移動に用する時間が二時間であったこと、先制攻撃はシモン側からではなく王軍のエドワード隊からであるとみなす点、更にヘンリ三世の隊も丘の上へ登ったとみている点である。両研究者の依拠した年代記が共通しているからであるが、同時に両者とも本職は軍人LT.-COLONELであって、その専門家としての知識からすればこの時間配分が妥当であるからかも知れない。

Burneが王の退却開始時刻を12時としたのはSt. Pancras Pr.の年代記が「第一刻から正午

表 1 1264年5月14日 両軍の行動と時刻に関する諸説

	Ramsey	Dimmock	Burne	Lemmon
日の出	4 : 14		4 : 30	3 : 00
Fletching 出発		5 : 00	4 : 30	4 : 00
丘上へ先頭到着		7 : 00	7 : 00	7 : 00
” 最後尾到着終了			9 : 00	9 : 00
エドワード隊攻撃開始			10 : 00	9 : 45
王隊の攻撃開始			11 : 00	9 : 45
” 終了			12 : 00	10 : 15
エドワード隊の戦場復帰			14 : 00	14 : 30

までの間に戦いが行われた⁵¹⁾と述べたからである。つまりエドワードは王が退却し始めているのも知らず、あるいは構わず、その後二時間も戦場を離れていたことになる。時間の点はともかく、エドワード隊が先制攻撃をかけたこと、彼が戦場を離れている間に戦闘の決着がついてしまったこと、この二点は多くの年代記と研究者が共通して述べる例である。Burne と Lemmon の二人はその時間を四時間程度とみたのである。年代記によってはエドワードはロンドン近郊の Croydon まで追跡したとも言われている⁵²⁾。この距離と、Ouse 川の沼地に逃げた市民を追いかけた時間とを併せて解釈して算定したのが四時間という結論であろう。ともかく現在までの研究状況は以上の通りである。

王弟は無様な逃避をしたが、ヘンリ三世自身は乗っていた馬を二度も殺される程戦場で働いたというエピソードも残っている⁵³⁾。それでも王軍は完敗した。エドワードの戦線離脱の影響は大きかったと言わねばならないだろう。エドワード隊がロンドン市民隊を蹴散らし、彼等を追いかけて戦場を暫く離脱したことによって、何故国王軍とシモン軍とに戦力の差が生じたのか。これはロンドン市民隊の大半が歩兵であり、エドワード隊が騎兵中心の隊であった為、シモン側の騎兵がほぼ無傷であったのに対し、王軍はその精鋭を失ったからであろう⁵⁴⁾。エドワード隊が何なくロンドン市民達を蹴散らすことができたのも、騎兵と歩兵とに圧倒的な戦力の差が存在していたからであると思われる。これは忘れてはならない点である。

それにしてもエドワード隊の一時的戦線離脱や、一部大貴族の逃亡はあったものの、国王軍の残りの戦士たちは戦場に残ったはずである。なのに王軍が完敗したのは何故か。この問題に取組むために、国王軍の構成はどうなっていたのか、つぎにそれを考察する。

3 召集された国王軍戦士たち

先述のようにアミアンから帰国した国王は、シモンとの武力対決を決意し1264年3月、軍隊の召集を命じた。Close Rolls に記載された召集関係の記事を日付順に列挙してみる⁵⁵⁾。

- ① 3月6日 ウィンザーにて Gilbert de Gaunt 宛。要点だけ訳す（以下同様）と、ウェールズ辺境地方での戦闘の為という理由で、「貴下が余に対して負う忠誠に従い in fide et dilectione quibus nobis tenemini」「騎馬武装し余に負う全奉仕により cum equis et armis et cum toto servitio quod nobis debetis」、mid Lent にオクスフォードに集まるべ

し。(同様の命令は Roger de Quenci 以下123名にだされた。)

- ②同日、同様の文面で聖職者にも命令が下された。司教 14名、大修道院長 37名、女子修道院長 4名。
- ③同日 各州のシェリフ宛、「管区内で王に義務を負う全ての者を軍隊へと in exercitu premuniri 集結させ、王に提供せよ。」
- ④3月7日 ウィンザーにて、Stephen de Meinil 宛。「騎馬武装し、友人・自前を問わず可能な限りの兵力を率いて cum equis et armis et cum toto posse suo quod perquire poterit tam de amicis suis quam gente sua propria 直ちに王の居るところへ出頭せよ。」(同様の命令は合計九人へ。)
- ⑤3月12日 オクスフォードにて、John de Balliol 宛。「余に負う忠誠とオマージュに従い」「騎馬武装して全員をひきつれて」、mid Lent にオクスフォードへ来るべし。「既に同様の命令を出したが、シャーウッドの森で手紙が奪われたので再度発行する。」(同様の手紙は全部で16名へ。)
- ⑥3月18日 オクスフォードにて、オクスフォードとパークシアの州裁判集会 comitatus に関して、Nicholas Sifrewast 宛。「現下の混乱に鑑み、余と王国に対して貴下等が負う忠誠にかけて所領没収 forfeiture の処罰を考慮し、友人その他もひきつれて騎馬武装して、直ちにオクスフォードに居る余の下へ来るべし。」(同様の命令は全部で106名に対して。)
- ⑦3月20日 オクスフォードにて、デボンシアのシェリフ宛。ウェールズ辺境地方での戦闘に対処するため、「王に義務を負う全て omnes illi qui nobis servitium debent が騎馬武装して奉仕すべく、直ちにオクスフォードに来るよう宣言せよ。」「またシェリフ自身も可能な限りのナイト・サージャント・エスクウィアをつれて来るべし。」「余はそれらのナイト・サージャント・エスクウィアに必要な経費を支払うつもりである。」(同様の命令はデボン・サマセット・ドーセット・サウサンプトン・ウィルトシア・オクスフォード・パークシアその他の各州シェリフ宛。)

以上七種類の召集命令を封建制との関連で分類すれば、

A 王の直臣へ奉仕義務履行を命ずるもの

①②③④⑤

B 王の直臣のうち中小の封建的土地所有者へ、州の裁判集会を通じて召集をかけたもの

⑥

C 直臣以外で騎乗可能な土地保有者をシェリフを通じて州単位で召集するもの

⑦

という三種類に分かたれる。いずれも召集された者は、騎馬武装し供の者をつれて参軍することを期待されている。召集されたからとは言え、全員が出陣したか否かは不明であるが、リュイスで戦った騎兵の一部はこれらの被召集者によって成りたっていたとみてよいだろう。

彼等以外に騎乗勤務をした可能性があるのは、王や大貴族のかかえる household knights と、個々の契約によって雇われる傭兵とである。前者については後述する。後者については、

リュイスの戦いに参加していたことを Powicke が示唆しているが⁵⁶⁾、雇傭契約にあたる文書が存在していないので実態を把握し得ない。従ってリュイスで戦った国王軍の騎兵のうち、具体的に人名を把握し得るのは、上述の史料に登場する場合以外には事実上あり得ない⁵⁷⁾。

上記 A・B・C のうち、C については召集そのものが不特定多数を相手にしたものであり、召集された人名を具体的に把握し得ないので、調査対象から省かざるを得ない。A と B に分類された人々はいずれも王の直臣ゆえ、彼等がどの程度の封土を王から受領し、どの程度の軍役奉仕の義務を王に負ったかを知るには『死後審問記録』*Calendar of Inquisition Post Mortem* が便利である。この記録は、直臣が没するか所領没収された際の所領と義務の状態を示すものであるから、作成年にバラつきがあり、1264年の状態を知るという目的には必ずしも合致しないが、ヘンリ三世とエドワード一世の時代にかけての直臣に関する記録を、ほぼ統一した方法で調査した記録として利用価値はあり得るだろう。

上記①～⑦のうち、②と③については出陣した人名が判明しないので調査不能である。また④と⑤とは文面からもわかるように重複しており、その中には①や⑥の人名と重複する者もある。その人たちを除くと、重複しないのは Robert de Brus, Nicholas Corbet, John Comyn, Alan de Usser の四名のみである。少数ゆえ今回は調査対象から省いた。残りの①と⑥にはそれぞれ同姓同名者がいるので、これを一人とみなすと、①には112名、⑥には100名がいることになる。以下便宜上、①を I、⑥を II と呼ぶことにする。*Inquisition Post Mortem* (以下 IPM と略記) にみられる所領規模から考えて、I は主として大領主で伯などの称号を持つものもある。II は中小領主から成る⁵⁸⁾。

I・II それぞれについて、①国王に対するナイト・サージャンティ等何らかの形での軍役奉仕義務の存在が明記されている人、②国王への義務は不明だが、封建的土地保有とか諸義務とかにかんする記事が少しでも記載されている人、③それらに関して何らの記載も無い人、という分類を行なった。(表2参照)

表2 召集された封臣の分類

	①	②	③	計
I	58	44	10	112
II	20	37	43	100

これら合計212名について、国王への軍役、他の主君への軍役、自らの臣下への下封に分けて、それぞれ軍役による保有であること(物納・金納は省く)を示す記事のみを抜き出して一覧表にした。煩瑣になるので I ①と II ②の表のみ以下に掲げる。(表3参照)

これらの表から直ちに判明するのは次の三点である。

- 1 直臣でありながら、王から軍役奉仕によって土地保有をすると明記された者の割合は低く、I で約半数、II では五分の一にすぎない。
- 2 I の大領主の中には軍役保有地量は多いにも拘らず、軍役奉仕量は少ない者がいる。
- 3 II の中小領主の軍役量は一騎士役の何分の一といった僅かなもの場合が多く、実際に

表 3 召集された封臣たちの軍役量 (I)

封 臣 名	国王への軍役					王以外の封主への軍役					備 考	
	I.P.M	年度	保有規模	軍役数	州	I.P.M	年度	封主	保有規模	軍役数		州
Axted, Rolland	A 741	H 54	3 f		Sr	A 741	H 54	Nevill, John Pridington, W Helgthe, Alex	2 f $\frac{1}{2}$ f $\frac{1}{10}$ f		Sr Sr Ke	
Balliol, Johannes	A 691	H 52		2 K 不定	Ht Nb							下封
Basset, Ricardo	B 192	E 4	barony		Np	B 192	E 4	barons of Stafford		1K	St	
Baton, Johannes	B 811	E 19		$\frac{1}{2}$ K	Be	B 811	E 19	Moune, John Wodehan, R.W Wyst 伯夫人 Melling, Reny Lincoln 伯	$\frac{1}{2}$ f $1\frac{1}{4}$ f $3\frac{1}{2}$ f $\frac{1}{4}$ f 1 f		Ox Es Sf Nf Li	
Beachamp, Robertus	A 864	不明		不明	So							with the king in the army, 下封 A 592, 2 f, So.
Bello Campo, Rogerus	B 409	E 9	1 f		Es	B 409	E 9	Burgh, Richard Ox 伯	$\frac{1}{4}$ 1 f		Sf Es	
						D 163	E 32	不明	1 f		Sx	
Bigod, Roger	A 744	H 54	barony marshal 1 f		Nf Br St	A 744		Warwick 伯 Raynard Ely 司教 Ely の honour Ox 伯	1 f $\frac{1}{2}$ f 2f 5 f 1 f		Sf Sf	
Blund, William	A 585	H 48		$5\frac{1}{2}$ K	Sf	A 585		Montek, W.	$\frac{1}{2}$ f		Nf	all held of the king in chief by service of $\frac{1}{2}$ knight
Bolteby, Nicholaus	A 824	H 57	1 f		Nb	A 824		Estotevile, J.	1 f		Yo	

Bosco,Ernald	B 222	E 5		$\frac{1}{2}$ K	Sf	B 222	E 5	Winchester 伯 Abbingdon 修 Houton,G	不明		Gl Br Np Le	下封 A 311, H 28, $\frac{1}{5}$ K (王軍で奉仕), Gl
						A 776	H 55	Winchester 伯	$16\frac{1}{2}$ f	$\frac{1}{2}$ K		
Botiler,Radulphus	B 390	E 9		3 K	Sa	B 128	E 3	Monte Alto,R.	$\frac{1}{3}$ f		Ch	
Brus,Peter	A 800 B 324	H 56 E 7 E 7 E 7	15 f $\frac{1}{2}$ f 16 f 15 f		Yo La Yo $1\frac{1}{2}$ K Wm							下封 A 800, 多数, Yo 下封 B 324, 軍没 下封 B 324, 軍没 (合計 16 Ks) 下封 B 324, 軍没
Briwes,Robertus	B 194	E 4	$\frac{1}{2}$ f		So	B 194	E 4	王弟 Nevill,John	1 f 1 f		Gl Es	
Burgh,Johannes,senior	B 142 C 644	E 3 E 3	barony $\frac{1}{2}$ f	$1\frac{1}{2}$ K	Np Ht							
Clifford,Roger	B 478	E 11	$\frac{1}{4}$ f 2 f		Bd 2 K Wm	B 478	E 11	Lincon 司教	1 f		Ru	
Columbariis,Matheo	A 437 D 454	H 43 E 10	1 vir 1 f	1 K	Sh Sh	A 564	不明	Devon 伯	15 f	Sh		下封 B 526, E 12, $\frac{1}{2}$ KS
Craystok,Thome	B 714	E 17	2 f		Nb							Cf, A 314, H 38 (父), 王に $2\frac{1}{4}$ Ks
Dinaunt,Oliver	C 532 A 424	E 27 H 43		1 K $\frac{1}{2}$ K	So Dv	C 532	E 27	王弟	1 f		Co	下封 C 532, E 27, 軍没 (合計 $2\frac{3}{4}$ Ks) 下封 B 327, E 5, $\frac{1}{2}$ Ks
Engaine,Henricus	A 809	H 56	serjeanty hauberk		Np Np	A 809		Basset,Ric	1 マナ		Np	
Everingham,Ade	B 385	E 9	barony 1 f $12\frac{1}{2}$ f	$2\frac{1}{2}$ K	Li Yo Ng	B 385 B 385	E 9 E 9	York 大司教		1 K	Ng	下封 385, E 9, 1 ks

Freshevull,Ankerus	A 707	H 53	$\frac{1}{4}$ f		Ng							
	B 617	E 15		$2\frac{1}{2}$ K	Db	A 707	H 53	Bardolf,William		2 K	Db	
				1 K	Db	B 617	E 15	Bardolf,William	2 f		Db	
				2 K	Ng							
Gaunt,Gilbertus	B 75	E 2	barony		Yo							
	C 476	E 26	barony		Li							
	D 233	E 33	2f		Ng	D 233	E 33	Lincoln 伯	3 f		Ng	下封 D 233, E 33, 軍役にて, Li
Gernun,Radulphus	A 850	不明	3 f		Es							
	B 63	E 2	1 f		Es							
Gorz,Radulphus	B 759	E 18	$\frac{1}{2}$ f		Ox	B 759	E 18	Lincoln 伯	$\frac{1}{2}$ f		Br	
Gouiz,William	C 541	E 27		$12\frac{1}{4}$ K	Do	C 541	E 27	Glastonbury 修 Cern 修		1 K	Do	下封 C 541, E 27, 軍役にて, Do
										1 K	Do	
Gurneye,Robertus	A 710	H 53	1 f	$\frac{1}{2}$ K	So Gl	A 710	H 53	Gloucester 伯 Gloucester 伯 Warwick 伯	$\frac{1}{2}$ f	$\frac{1}{2}$ K	Wi	
										$22\frac{1}{2}$ K	So Gl	
Hastings,Willemus	B 266	E 6		1 K	Br							
				2 esq								
				1 K	Gl							
				2 esq								
Huntercumb,Willelmus	A 755	H 55	$\frac{1}{2}$ f		Bd	A 755	H 55	Lincoln 司教	$\frac{1}{4}$ f		Es	
Kaneis,Radulph'	A 443	H 43		$\frac{1}{2}$ K	Nf	A 443	H 43	Gloucester 伯		1 k	Sr	

	B 212	E 5		$\frac{1}{2}$ K	Nf Ca	B 212	E 5	Balliol,John Gloucester 伯 Ox 伯 Winchester 伯 St.John,R Gloucester 伯 Peterborough 修	$\frac{1}{4}$ f 2 f 1 f $1\frac{1}{2}$ f $\frac{1}{2}$ f	$\frac{1}{4}$ K 2K 1 K 6 K	Hd Gl Ca Sh Sh Sr Np	
Lancastre,Roger	B 827	E 19		$\frac{3}{10}$ K	Wm							
Malo Laku, Peter	B 304	E 7	$33\frac{1}{5}$ f	4 K 2 K	Yo Yo	B 304	E 7	Durham 司教		$\frac{1}{2}$ K		下封 B 304 下封 B 304 (テナント 6人)
Maudut, Willelmus	A 679	H 52		$\frac{1}{5}$ K 2 K	Gl Wr							下封 A 679,H 52,約 39 f
Mautravers,Johannes	C 404	E 25	10 f		Do	C 404	E 25	Say,H	$\frac{1}{2}$ f		Br	下封 B 689, E 16, $\frac{1}{3}$ KS, Do
Merk, Henricus	A 669 A 871 A 742 A 742	H 52 H 54 H 54 H 54		3 K 3 K 1 K 2 K	Es Es Es Es	A 669 A 871	H 52 H 54	Hereford 伯 Hereford 伯	1f 4 K		Es Es	下封 A 742, H 54
Merk, Ingrams	A 441	H 43	2 f		Es							
Munfichet,Ricardus	A 711	H 53	barony		Es							
Musard,Radulphus	A 601	H 49	2 f barony 1 f		Db Gl Br							

Nevill,Johannes	B 358	E 8	serjeanty	$\frac{1}{2}$ K	Br	B 438	E 10	Clare,Gilbert London 司教 Ripariis,J	1 K	Es			
	B 438	E 10		1 K	So							1 K	Es
				$\frac{1}{2}$ K	Es							1 K	Es
					Es							3 K	Es
				1 K	Sx								
				1 K	Wi								
		1 K	Li								下封 B 438 軍役で (合計 6 Ks)		
Nevil,Robertus	B 435	E 10		2 K	Yo	B 483	E 11	Malo Laku,P	5 K	Yo			
	B 483	E 11		2 K	Yo								
Paunton,Jacob	D 275	E 33		$\frac{1}{3}$ K	Li								
Penebrig,Henricus	B 306	E 7		1 K	He	B 306	E 7	Hereford 司教	$\frac{1}{3}$ K	He			
Percy,Peter	A 653	H 51		$\frac{1}{4}$ K	Yo								
Peval,Andre	B 45	E 2	socage		Br						free tenant		
Pointz,Nicholao	B 18	E 1		1 K	So	B 18	E 1	Gloucester 伯	2 K	Gl			
				$\frac{1}{2}$ K	Ke								
Pomery,Henricus	B 416	E 9	barony	1 K	Dv						下封 D 296 奉仕不明		
	D 296	E 33			Co								
Quenci,Roger	A 732	H 54		1 K	Li						下封 A 732 軍役奉仕者 3 人		
				5 K	Ca								
				1 K	Ox								
				1 K	Np								
Rabain,Elie	B 567	E 13	barony		Li								
Reinny,Willelmus	B 151	E 3	serjeanty serjeanty		Cb								
					So								
St.Amando,Almaricus	B 592	E 13		1 K	Bd								
		E 14		1 K	Ox								

Say,Willelmus	A 813 C 271	H 56 E 23		1 K 不明	Ke Ht	A 813 C 271	H 56 E 23	Hereford 伯 Gloucester 伯 Warene,J.		1 K $\frac{1}{3}$ K 13 $\frac{1}{2}$ K	Ca Nf Sx	
Stotevill,Robertus	D 369	E 34		1 K 1 K 1 K 2 K	Db Ng Es Nf							
Sutleg,Bartholomeo	B 347	E 8		2 K 2 K	Wr Gl							
Sutton,Robertus	B 61	E 2		$\frac{1}{2}$ K	Ng							A 682, knight
Tany,Richard	A 764	H 55		$\frac{1}{2}$ K	Es	A 764		Hereford 伯		7 $\frac{1}{2}$ K	Es	
Tateshal,Robertus	B 4 D 163	E 1 E 31 E 32	barony serjeanty serjeanty 31 $\frac{1}{4}$ f	1 K $\frac{5}{6}$ K	Nf Nf Li Li Br Nf							下封 D 163, E 31, 32
Tracy,Henricus	B 76	E 2	barony	2 K 4 esq	Dv Dv							
Watford,Eustchio	B 182	E 4		1 K	Np							
Wauton,Johannes	D 120	E 32		$\frac{1}{4}$ K	Li							

表 3 召集された封臣たちの軍役量 (II)

封 臣 名	国王への軍役					王以外の封主への軍役						備 考
	I.P.M	年度	保有規模	軍役数	州	I.P.M	年度	封主	保有規模	軍役数	州	
Brampton,Briano	C 291	E 23		$\frac{1}{20}$ K	Sa	C 291 A 812	E 23	Mortimer,E fitz John,J		1 K $\frac{1}{2}$ K	He Sa	<p>略号解説</p> <p>1. I.P.M=<i>Inquisitions Post Mortem</i> A=I.P.M.Henry III B= " Edward I 1-19 C= " " 20-28 D= " " 29-35 A.B.C.Dの後の数字は各巻の記事番号。</p> <p>2. 年度欄は治世年で表示 HはHenly III. EはEdward I.</p> <p>3. 保有規模 Knight fee,barony,serjeanty,marshal,socage 保有と表示されている保有地の大きさ。fはfee。</p> <p>4. 軍役数 by Knight serviceと表示されている量を示す。 Kはknight service.esqはesquire。</p> <p>5. 州名は次の略号を用いた。</p> <p>Bd=Bedford Ht=Hertford Br=Berk Ke=Kent Ca=Cambridge Nb=Northumberland Ch=Chester Ng=Nottingham Co=Cornwall Nf=Norfolk Db=Derby Np=Northampton Do=Dorset La=Lancashire</p>
Cestreton,Radulphus	B 28	E 1		1 K	Ox							
Dunstanvil,Walterus	A 722	H 54		3 K	Wi							
Everard,Willelmus	B 298	E 7		$\frac{1}{2}$ K	Do	B 306	E 7	Mohun,J	1 f		Do	
Faleis,Elie la	A 851 B 92	不明 E 2	serjeanty serjeanty		Sh Sh	B 92	E 2	Burgh,J		1 K	Do	
Giffard,Walterus	B 314	E 7		$\frac{1}{6}$ K $\frac{1}{2}$ K	He Gl							
Hastings,Miloni	D 309	E 33		$\frac{1}{4}$ K	Bg	A 719	H 53	Hastings,H.		1 K	Sf	
Hastings,Willelmus	B 266	E 5		$1\frac{1}{2}$ K 2 esq 1 K 2 esq	Li Gi							
Insula,Robertus	C 590	E 28	serjeanty		Li	A 773 A 528	H 55 H 46	Balliol,H Bolobek,H		1 K $\frac{1}{2}$ K	Nb Nb	
Mara,Robertus	A 787	H 56	socage		Wi							
Martel,Willelmus	A 239	H 36	serjeanty		Es	A 872 C 31	不明 E 20	Fortibus,W Cortenay,H	$\frac{1}{3}$ f	$\frac{1}{2}$ K	Do Dv	
Maudut,Johannes	A 481 D 61	H 54 E 31		1 K 1 K 1 K	Es Ox Wi	A 481	H 45	Cantilupio,S		1 K	Es	

Mohun,Willelmus	B 436 B 530	E 10 E 13		3 K $\frac{1}{4}$ K	Sh Kirkeny						
Peche,Almarico	B 663	E 16		不定	Nf						
Pruz,Willelmus	A 740	H 54		$\frac{1}{2}$ K	Dv	B 306	E 7	Moun,J	$\frac{1}{3}$ f		Dv
Punchadun,Olivero	D 451	E 11		1 K	Sh	B 16	E 1	Sovery,R	1 f		Br
Romely,Alanus	A 725	H 54		$\frac{1}{2}$ K	Np						
St.Martino,Willelmus	A 549	H 42 H 47		$2 \frac{1}{2}$ K $\frac{1}{2}$ K	Wi Do						
Sutton,Willelmus	A 682	H 52		不定	Ng						
Wrokeshal,Galfridus	D 215	E 30		$\frac{1}{4}$ K	Br						

Dv=Devon Le=Leicester
 Es=Essex Li=Lincoln
 Gl=Gloucester Ox=Oxford
 He=Hereford Ru=Rutland
 Hd=Huntingdon Sa=Shrop
 Sf=Suffolk So=Somerset
 Sh=Southampton Sr=Surrey
 St=Stafford Sx=Sussex
 Yo=York Wi=Wiltshire
 Wr=Warwick Wm=Westmorland

は軍役を果たしていたのか疑わしい。

これら三点から判断すると、1264年5月リュイスで戦った国王軍は、主に軍役奉仕に義務を負う封臣たちが主たる構成員であったとはとても言い難く、1264年当時の封建制は、主君が封臣を軍事的に動員する唯一の制度であるとは言えないようである。従って王やその他の封主たちは軍事力確保のためには、封建制と並んで別の方法を供えていなければならないだろう。ともかく I. P. M の記事の中にも封臣たちが封土受領の見返りとして貨幣納付をする例がみられ、奉仕は相当程度金納されていたとみてよい。このような事例を根拠として、13世紀後半のイングランドにおける封建制は、衰退あるいは財政的封建制へと変質していたという説も唱えられている⁵⁹⁾。

封建制が衰退していたか否かという問題に直ちに答えることはできないので、筆者は上掲の表を利用して、別の角度からこの問題に取組みたい。

たしかに王は封建制によって封臣を動員することができにくくなってはいるが、IとIIとはその程度に差がある。王は特に中小領主を動員することが難しかったと言うべきであろう。中小領主の大半は王からみれば陪臣である。だからこの表に現れているのは中小領主のうちほんの一部にしかすぎないが、それにしても、この中小の直臣たちは主君である国王に軍役奉仕をしたのだろうか。II④の表に現れる中小の直臣たちの負担軍役数は大半が1以下であるが、よく見ると王に負う軍役数よりも、他の主君に負う軍役数の方が多く例がいくつかある。

例1 B. Brampton は国王に対しては $\frac{1}{8}$ しか負わないが、E. Mortimer には1, John fitz John には $\frac{1}{2}$ 負っている。

例2 E. Faleis は王からサージャンティ保有しかしていないが、J. Burgh には1騎士役を負っている。

例3 M. Hastings は王には $\frac{1}{4}$ しか負わないが、H. Hastings には1騎士役を負っている。

彼等の封主たちはそれぞれシモン側の働き手であった。国王以外の主君に仕える封臣も、国王への忠誠を優先するというのがイングランド封建制の特色であるといわれていることは承知している。しかし上述のような例の場合、John fitz John や J. Burgh 等の動員に関する影響力を無視できないように思う。

更に一部の大貴族の場合には、中小領主を動員する際だけではなく、より上層のと直臣たちを動員する際にも影響力を示し得たと思われる。I④の表のうち王以外の主君への軍役奉仕の欄をみると、グロスター伯、ヘリフォード伯、ウォレン（サリー）伯の三人に対し軍役保有をする者が多い。

例4 グロスター伯から軍役保有する者

R. Gurneye	$\frac{1}{2}$ ks,	22 $\frac{1}{2}$ ks.
R. Kaneis	1 ks,	1 ks.
J. Nevill	1 ks.	
N. Pointz	2 ks.	
W. Say	$\frac{1}{3}$ ks.	

例5 ヘリフォード伯から軍役保有する者

H. Merk	4 ks.
W. Say	1 ks.
R. Tany	7 ½ ks.

例6 ウォレン伯から軍役保有する者

W. Say	13 ½ ks.
--------	----------

これら三人は騎兵動員力において、かなりの実力を備えていたと言ってよいだろう。これら三人に対して軍役を負う者たちは、自らが王の直臣であると自覚するよりも、これら三人の大貴族たちをそれぞれの主君とみなしていた可能性が強い。王としては直臣を動員する際にさえ、これら三人の大貴族の協力を依存せざるを得なかったのではないだろうか。三人のうちグロスター伯はシモン側に、あとの二人は国王側についた。リュイスの戦いの勝敗は、グロスター伯の動員力の大きさを想像させる。

結局、王に軍役奉仕すべき直臣の動員に関してさえも大貴族の協力、あるいは関与がうかがわれる。中小領主の大半を占める陪臣たちの動員は、もちろんその主君である大貴族の主導のもとに行なわれたはずであるから、直臣、陪臣を問わず騎兵の動員においては、大貴族の動員力を国王は無視し得なかったに違いない。しかし一部の直臣・大貴族は（例えば P. Malo Laku, W. Maudut, A. Everingham）保有地面積のわりには少ない軍役奉仕義務を負ったが、その上、自らが王に対して負う軍役量よりもしばしば多めの軍役奉仕義務と交換に、封土を陪臣へ再下封した。

例7 O. Dinaunt は王から 1 ks. で保有し 2 ¾ ks. で再下封した。

例8 J. Nevill は王から 1 ks. で保有し 6 ks. で再下封した。

例9 R. Nevill は王から 2 ks. で保有し 13 ks. で再下封した。

こうしてみると国王軍の中における騎兵の動員に関しては、直臣大貴族の関与する割合が高く、王は彼等の協力無しには十分な兵力を集められなかったのではないかと思われるほどである。

リュイスの戦いで圧倒的な強さを示した騎兵であるが、その騎兵を国王軍へと結集させる方法としての封建制に関して、先述のように、13世紀後半には軍事制度としては実質の意味をもたなくなり、かわりに傭兵制が主流となったという考え方がみられる。1264年当時、傭兵制がどの程度発達していたのかを示す網羅的な証拠はないが、少なくとも王が金で雇う傭兵や国王直属騎士が主流をなす、いわば国王直結の軍隊が存在したという実証は、現在のところなされてはいない。逆に、上述のリュイスの戦いの過程と、動員された封臣たちの相互関係の調査によれば、封建騎士軍の動員における直臣・大貴族の影響力の大きさが示されたと考えられるから、封建制が軍事制度として実質的には機能しなくなった⁶⁰とは言えないように思う。もちろん国王が必要とする軍事力の全てを封建制が供給したわけではないが、主従間の土地保有と結合した軍役奉仕関係が全く機能しなくなったわけでもない。国王は従来通り、直臣・大貴族の軍事的動員力に依存していた。

もっとも王が封建軍の召集命令を下したからといって、直ちに義務を負う騎士の全てが勢ぞろいした訳ではない。しかし出頭しない封臣に対して、国王は繰り返し出頭を命じた。

例10 バトルにて Robert Crevequer 宛 5月9日「この命令をうけ次第、騎馬武装して王のもとへ急行せよ。」彼は去る3月6日オクスフォードへ召集されたIのグループの一員である。

例11 5月9日 王弟の名で William de Say に対し同様の出頭命令。Say も3月6日に召集されている。

例12 5月11日 リュイスにて William de Say, Egidium de Argentin 宛同様の命令⁶¹⁾。三人のうち Crevequer と Argentin はシモン側についた。また聖界諸侯にも騎兵の提供を義務づけたのは上述の通りだが、提供をしぶる諸侯には再度命令を出した。

例13 4月3日 オクスフォードにて サウサンプトンのシェリフ宛

「余の命令に従い余に奉仕すべきバロン領、保有地その他が余に満足を与えるまで没収される。(中略)シェリフである貴下はウィンチェスタ司教のバロン領とアビンドン修道院長のバロン領とを余のために没収し管理せよ。」

同様にノーサンプトン州のシェリフ Adam de Grenvill に命じてイーリー司教とラムゼイ修道院長のバロン領を没収させたし、またノッチングム州とダービー州のシェリフにヨーク大司教とリンカン司教のバロン領の没収を命じた⁶²⁾。

王は決して封建軍の召集を放棄したわけではない。

以上は封建騎士軍の召集についての考察であるが、次に非封建的軍事力について見通しだけ述べておこう。傭兵については先述したように網羅的な史料がないので割愛せざるを得ない。家中騎士とも呼べる household knights についても史料の中に散見するが網羅的な史料は無い。リュイスの戦いにも騎乗して参加したと思われる例は、Henry de Montfort や John de la Hay の household knights であろう⁶³⁾。国王も同様の household knights をかかえていた⁶⁴⁾。M. Prestwich によれば、その数はエドワード一世時代でも100人を超えることはなかったという⁶⁵⁾。もちろん一部の大貴族も household knights をかかえ戦場へつれて来た。少し後の年代になるが1267年にグロスター伯がロンドンに進駐した際、household knights を多数率いてきた例が参考になる⁶⁶⁾。こうしたナイトをかかえることができるのは大貴族であったから、封建騎士軍のみならず、非封建的 household knights の動員にも大貴族は深く関与していたと言えよう。

おわりに

先に指摘したように、リュイスの戦いでシモンの軍隊が勝利したのは奇襲・急襲によるのではなく、国王軍のうちのエドワード隊の戦線離脱と大いに関係があると思われる。これと関連して最後にもう一つ指摘しなければならない。上述のごとく国王は大貴族の兵力・動員力に大いに依存していたにも拘らず、リュイスでは王軍にいた大貴族たちは逃亡したり捕虜になったりして、大した働きはできなかった。かえってシモン側についた「最近大所領を相続したばかり

りの若者たち」(Powicke)の軍の方が勝利した。この点は重要であると思われる。ヘンリ三世は自らの統轄下に入るべき一部の直臣の戦力を支配し得ていなかったことを意味するからである⁶⁷⁾。最近 D. Williams はいくつかの伯領において伯位が空席のため leaderless baronage が多数発生し、彼等がシモンの支持者となったと報告した⁶⁸⁾。このことは王が大貴族を介して中小領主たちを把握するのが順当であったことを裏書きしているかのようである。

国王自身がこれらの「若者たち」を直接掌握することができず、グロスター伯のように騎兵を動員する力のある一部の直臣が国王の政策に不満を持って、シモン側に加担したとするならば、リュイスの戦いにおけるシモン軍の勝利は、それなりの必然性があったと言えなくもないのである。

註

- 1) Treharne, R. F., 'Why the Battle of Lewes matters in English History', *The Battle of Lewes, Its Place in English History*, The Friends of Lewes Society, 1964, pp. 13-14.
- 2) 拙稿「一二六四年の反乱者たち」『イギリス中世社会の研究』昭和六〇年, 山川出版社。同「一二六四年の治安官」『ジェントルマンとその周辺』昭和六二年, ミネルヴァ書房。
- 3) Ramsay, J. H., *The Dawn of the Constitution or The Reigns of Henry III and Edward I*, Oxford, 1908. この書物を好意的に評価したものとして Powicke, F. M., *King Henry III and Lord Edward*, Oxford, 1947, p. 466n. 及び Maddicott, J. R., 'The Mise of Lewes, 1264', *English Historical Review*, 1983, p. 588n. また Carpenter, D. A., 'Simon de Montfort and the Mise of Lewes', *Bulletin of the Institute of Historical Research*, LVIII, 1985, p. 3 を参照。

Ramsay に対し Powicke の政治史叙述はより一層正確さを追求している。それは史料として年代記よりも公文書を重用した為であり、王の行程、発言、行動等はそれ以前の研究書に比べて、はるかに信頼できるものとなった。その反面、公文書には現われにくい事柄、例えば王の敵方の動向、戦闘場面等の描写は軽視される傾向がある。

- 4) ここでリュイスの戦いに関する文献を列挙しておくことにする。本稿作成に関係するものを中心としているので、全てを網羅したわけではない。

(1) 年代記, その他

Rishanger, William; *The Chronicle of William De Rishanger of the Barons' War*, ed. by J. O. Halliwell, Camden Society, 1840.

De Antiquis Legibus Liber : Chronica Majorum et Vicecomitum Londoniarum, ed. by T. Stapleton, Camden Society, 1846 (translated in H. Rothwell ed., *English Historical Documents*, vol. 3, London, 1975, pp. 159-197).

Flores Historiarum, per Matthaeum Westmonasteriensem Collecti, Rolls Series, 1890 (trans. in C. D. Yonge, *The Flowers of History, collected by Matthew of Westminster*, 2 vols, London, 1853).

Wykes; *Chronicon vulgo dictum Chronicon Thomae Wykes, 1066-1289*, in *Annales Monastici*, iv, Rolls Series, 1869.

Chronica Majora : Matthew Paris, ed. by H. R. Luard, 6 vols, Rolls Series, 1872-83 (trans. by J. A. Giles, *Matthew Paris' English History*, London, 1856).

Robert of Gloucester, The Mateical Chronicle of, ed. by W. A. Wright, Rolls Series, 1887 (trans. in W. H. Hutton, *Simon de Montfort and His Cause, 1251-66*, London 1888, pp. 128-31).

Oxenedes, John de, Chronica, ed. by H. Ellis, Rolls Series, London, 1859.

Annales Prioratus de Dunstaplia, AD. 33–1297, *Annales Monastici*, iii, 1886 (trans. in H. Rothwell ed. *English Historical Documents*, vol. 3, 1975, pp. 197–206).

Chronica de Mailros, ed. by J. Stevenson, Bannatyne Club, Edinburgh, 1835 (trans. by J. Stevenson, *Church Historians*, iv pt. i, pp. 72–242).

Wright, T. ed., *The Political Songs of England for the Reign of John to Edward II*, Camden Society, 1839.

Shirley, W. W., ed., *Royal Letters, Henry III*, vol. 1 & 2, Rolls Series, 1862–6.

Rymer, T., *Foedera, Conventiores, Litterae*, ed. by T. D. Hardy and D. Sandeman, vol. i pts. I & II (1066–1307), London, 1816.

Close Rolls, Henry III, 1261–64, Public Record Office, 1936.

Calendar of Inquisitions Post Mortem: P. R. O.,

vol. 1 Henry III 1904, vol. 2 Edward I 1906, vol. 3 Edward I 1912, vol. 4 Edward I 1914.

(2) 研究文献

Blaauw, W. H., *The Barons' War*, 2nd ed. London, 1871.

Prothero, G. S., *Life of Simon de Montfort*, London, 1877.

Bémont, C., *Simon de Montfort*, Paris, 1844 (trans. by E. F. Jacob, Oxford 1930).

Saltzmann, L. F., *Victoria County History, Sussex*, vol. 1, 1905, 'Political History'.

Ramsay, J. H., *The Dawn of the Constitution*, Oxford, 1908.

Powicke, F. M., *King Henry III and Lord Edward*, Oxford, 1947.

Trefarne, R. F., 'Why the Battle of Lewes matters in English History', *The Battle of Lewes*, Lewes, 1964.

Oman, C., *A History of the Art of War in the Middle Ages*, vol. 1, London, 1898.

Dimmock, H. L. F., 'Some Musings in the Battle of Lewes, A. D. 1264', *Royal Artillery Journal*, LXI, 2, 1934, pp. 258–67.

Burne, A. H., *More Battlefields of England*, London, 1952.

Lemmon, C. H., 'The Field of Lewes, 14th May 1294', *The Battle of Lewes*, 1964.

Beamish, T., *Battle Royal*, London, 1965.

Seymour, W., *Battles in Britain*, vol. 1, London, 1975.

Smurthwaite, D., *The Ordnance Survey Complete Guide to the Battlefields of Britain*, Exeter, 1984.

Maddicott, J. R., 'The Mise of Lewes, 1264', *English Historical Review*, xcvi, 1983, pp. 558–603.

Carpenter, D. A., 'Simon de Montfort and the Mise of Lewes', *Bulletin of the Institute of Historical Research*, LVIII, no. 137, 1985.

Williams, D., 'Simon de Montfort and his Adherents', *England in the Thirteenth Century*, ed. by W. M. Ormrod, Woodbridge, 1985, pp. 166–177.

5) 以下の叙述は主として Ramsay, *op. cit.*, pp. 210–226. に依る。

6) Wykes, *op. cit.*, 139.

7) Mailros, *op. cit.*, 192.

8) この時以後の王の足どりは Kingsford, C. L., *The Song of Lewes*, Oxford, 1890, appendix, II を参照。

9) *Ann. Dunst.*, 226 ; M. West., *op. cit.*, II, 486.

10) *Foedra*, i, 781.

11) *Annales Londonienses*, ed. by W. Stubbs, 1882, p. 61.

12) *Lib. Ant. Leg.*, 61.

13) Trefarne, R. F., 'The Battle of Northampton, 5th April 1264', *Northamptonshire Past and*

- Present*, II, 1955, pp. 13-30.
- 14) Rishanger, p. 23 ; Blaauw, *op. cit.*, p. 128 n. 6.
 - 15) Ramsay, *op. cit.*, p. 218.
 - 16) *Close Rolls*, *op. cit.*, pp. 383-4.
 - 17) *Lib. Ant. Leg.*, pp. 64-5. 使者はロンドン司教とウースター司教であったという年代記もある。
Ramsay, *op. cit.*, p. 219.
 - 18) Rishanger, *op. cit.*, p. 30.
 - 19) Godffrey, W. H., *Lewes official Guide*, Lewes, 1977, pp. 23-5.
 - 20) *Oxenedes*, p. 221.
 - 21) Powicke, *op. cit.*, p. 465.
 - 22) Ramsay, *op. cit.*, p. 224 ; Carpenter, *op. cit.*, p. 7.
 - 23) 王弟の振舞を風刺した詩がつくられた。Wright, *Political Songs*, p. 69 ; Ramsay, *op. cit.*, p. 224.
 - 24) Ramsay, *op. cit.*, p. 225 ; Maddicott, *op. cit.*, pp. 600-1 ; Carpenter, *op. cit.*, p. 11.
 - 25) Blaauw, *op. cit.*, p. 169 ; Halliwell, *op. cit.*, p. 134.
 - 26) Blaauw, *op. cit.*, p. 173.
 - 27) Burne, *op. cit.*, p. 112.
 - 28) Blaauw, *op. cit.*, p. 174.
 - 29) Blaauw, *op. cit.*, pp. 174, 358 ; Burne, *op. cit.*, pp. 113-4.
 - 30) Blaauw, *op. cit.*, p. 195.
 - 31) Burne, *op. cit.*, p. 113.
 - 32) Blaauw, *op. cit.*, p. 197.
 - 33) *Ibid.*, p. 354 ; Burne, *op. cit.*, p. 110.
 - 34) Seymour, *op. cit.*, p. 53.
 - 35) Blaauw, *op. cit.*, p. 354 ; Burne, *op. cit.*, p. 112.
 - 36) Blaauw, *op. cit.*, p. 199.
 - 37) Blaauw, *op. cit.*, pp. 210-11 ; Halliwell, *op. cit.*, pp. 136-7.
 - 38) Beamish, *op. cit.*, pp. 134, 198-200 ; Halliwell, *op. cit.*, p. 135.
 - 39) Blaauw, *op. cit.*, p. 169.
 - 40) Blaauw, *op. cit.*, p. 174.
 - 41) *Ibid.*, p. 197.
 - 42) *Ibid.*, p. 199.
 - 43) Ramsay 説は地図参照。Burne, *op. cit.*, p. 112.
 - 44) Burne, *op. cit.*, pp. 113-4 ; Smurthwaite, *op. cit.*, pp. 70-1.
 - 45) 人骨の発見は1810年に報告され (Beamish, *op. cit.*, pp. 200-4), その後もリュイス周辺各地で男ばかりの人骨が、集団で発掘された。疫病死によるものでは無いと言われている。
 - 46) Ramsay, *op. cit.*, p. 222 ; Oman, *op. cit.*, p. 421.
 - 47) Beamish, *op. cit.*, pp. 199-200.
 - 48) Ramsay, *op. cit.*, p. 221.
 - 49) Burne, *op. cit.*, pp. 110-12.
 - 50) Ramsay, *op. cit.*, p. 220 ; Dimmock, *op. cit.*, p. 264 ; Burne, *op. cit.*, p. 113 ; Lemmon, *op. cit.*, pp. 103-120.
 - 51) Beamish, *op. cit.*, p. 139.
 - 52) Blaauw, *op. cit.*, p. 195.
 - 53) Beamish, *op. cit.*, p. 139.
 - 54) Rishanger, *op. cit.*, p. 32.
 - 55) *Close Rolls*, *op. cit.*, pp. 375-85.

- 56) Powicke, *op. cit.*, p. 467n.
 - 57) Treharne, 'The Battle of Northampton', p. 81.
 - 58) *Ibid.*
 - 59) 森岡敬一郎「13世紀イングランド軍制史上の一史料」『三田学会雑誌』62-10, 11, 1969年。
 - 60) Powicke, *op. cit.*, p. 475.
 - 61) *Close Rolls, op. cit.*, p. 383.
 - 62) *Ibid.*, pp. 382-4.
 - 63) *Calendar of Inquisitions Miscellaneous*, vol. 1, Public Record Office, 1916, no. 1024.
 - 64) *Calendar of Patent Rolls, Henry III*, 1158-66, pp. 329, 359, cf. pp.322, 324, 325.
 - 65) Prestwich, M., *War, Politics and Finance under Edward I*, London, 1972. pp. 46-8.
 - 66) *Calendar of Patent Rolls, Henry III*, 1266-72, pp. 145-7.
 - 67) Powicke, *op. cit.*, p. 465. パウイクが, 王に反抗した連中は「若く, 最近大領地を相続した者」であり, 「王と封建関係, 大貴族と血縁関係があるとはいっても, 王の恩顧 favour を受けていたわけではない」と述べている点は重要である。
 - 68) Williams, D., *op. cit.*, pp. 174-5.
- 本稿は1986年度神戸女学院大学研究助成による成果の一部である。

原稿受理 1987年 8月24日